

## 2000年代の日本の絵本をふりかえって

執筆者：竹迫 祐子

掲載誌：展覧会パンフレット「2000年代の日本の絵本展 2000-2009」

2010年5月14日 ちひろ美術館

2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ、それにつづくイラク戦争、相次ぐ地域紛争。2008年、リーマンブラザースの破綻をきっかけとするアメリカ発世界金融危機。21世紀の幕開けは、日本にとっても、世界的に見ても激動の10年であった。この10年間に、アメリカでは初のアフリカ系大統領、バラク・オバマ氏が就任し、日本でも政権与党が変わった。同時に、この10年間で地球の温度はさらに上昇、北極やアイスランドの氷解は進み、日本の海面は3cm上昇したといわれる。

00年代、日本の絵本はどのような様相を見せたのだろうか。本展では、2000年から2009年に出版されたおよそ2万冊の絵本の中から、この10年間の日本の絵本を語るのに不可欠と思える21人の画家の絵本27冊を選び、約130点の原画を展示し、日本の絵本の00年代を概観してみたい。

### 新しい世代の創作者たちの登場

1990年初頭のバブル経済崩壊以降、低迷をする日本経済下、90年代後半からは出版不況も叫ばれる中、子どもの本は強いと言われた。実際に、00年代に入ってから毎年3000冊前後の児童書が新刊として出版されその内1500冊から2000冊が絵本である。書店の棚には、1960年代後半から70年代初頭の絵本ブームといわれた時期に刊行された絵本から、新刊までさまざまな絵本が並ぶ。本展の21人の画家の内、長新太(1927-2005)、井上洋介(1931-)、瀬川康男(1932-2010)、田島征三(1940-)、らは、60・70年代の絵本ブームで中心的な役割を担い、その後、本格的に絵本製作をはじめ片山健(1940-)とともに、日本の絵本を牽引してきた

一方、1990年代終盤以降に、はじめて絵本の世界に登場した画家たちも少なくない。長谷川義史(1961-)、酒井駒子(1966-)、出久根育(1969)、田中清代(1972-)、竹内繭子(1974-)、及川賢治(1975-)といった画家たちである。子ども時代には、すでに長や井上や瀬川らの絵本が存在しており、個々の環境の違いはあっても、彼らは絵本のある時代の中で育った。

絵本の創り手というなら、編集者の世代交代も進んだ。創り手では、西村繁男(1947-)、あべ弘士(1948-)、スズキコージ(1948-)、いせひでこ(1949-)、伊藤秀男(1950-)といった団塊の世代が、つづく村上康成(1955-)や武田美穂(1959-)とともに活躍しているが、作家と異なり、定年退職のある出版社の編集者の場合、世代交代は一挙に進む。団塊の世代が定年を迎えた00年代の後半は、編集者の平均年齢はぐっと下がった。また、出版社に所属しないフリーの絵本編集者が活躍し、魅力的な絵本を創り出していった。

加えて、智内兄助(油彩画)、村上潔(あきびんご/日本画)、藍澤ミミ子(版画)といった他ジャンルの画家たちも、新たに絵本表現に関わった。

## 読者層の広がり と 絵本の読書環境の充実

絵本ブームに子ども時代を過ごしたという点では、創り手だけでなく、絵本の読者も同様である。自分のために、また、親となって子どものために実際に絵本を買う 30代から40代にかけての世代の人たちも、生まれたときから絵本のある時代に育った。

さらに、絵本を取り巻く 00年代の特徴的な状況として、絵本編集者の小野明は、ミリオンセラーとなった絵本『葉っぱのフレディ』や『いつでも会える』を挙げ、「絵本を買う大人」の存在による市場拡大を指摘している。

2000年は、日本初の「子ども読書年」であった。1993年に、「子どもの絵本の出会い会」が発足して以降、子どもの読書環境整備に向けてさまざまな取り組みが行われてきたが、そのひとつの結実が2000年の国際子ども図書館の開館と子ども読書年であった。翌01年には、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布され、義務教育の中でも積極的に読書環境の充実が求められ、ゆとり教育の導入とも重なって、クラス単位での朝の集団読書に繋がっていく。

同年には、日本でもブックスタートの活動がはじまる。イギリスではじまった赤ちゃんに絵本を手渡し、親と子が絵本を通して触れ合う時間を大切にするこの活動は、地方自治体の図書館、保健センター等々を拠点に、現在では全国の718市町村で展開されている。

こうした読書環境の充実が、2000年代の日本の絵本の大きな特長であったと言える。

## 絵本の普遍性——絵本に求められるもの

地球規模の環境破壊、貧困、格差社会、戦争や紛争。こうした時代の中で2000年代を最も象徴する言葉は、「癒し」であったように思う。裏を返せば、ことほど左様に日本人は心身ともに疲れ果てているということであろう。「癒し」と同様に、キーワードをいくつか挙げるならば「やさしさ」「ふれあい」「ぬくもり」「よろこび」「ユーモア」「共生」「寛容」、そして「生命」「平和」。とりわけ、戦争と平和の岐路にあって、「生命」とともに「喪失」と「なぐさめ」は、大きな意味を持った。10年前なら、照れくさくて口にされなかった言葉が、求められた。直截的な表現も、絵本は程よい抽象と省力で伝える力がある。

「やさしさ」も、「ふれあい」も、「ぬくもり」も「よろこび」も、「生命」も「平和」も、ある意味では、絵本が語りつづけてきた普遍的なテーマである。日本の絵本の00年代は、絵本が持つ普遍性ゆえに、絵本が求められた時代であったとも言える。

それは、60年代、ベトナム戦争の激化の中での日本の絵本ブームと重なり合う。かつて、児童文学は「希望の文学」と呼ばれた。絵本も同様である。その特性こそが、厳しい時代の中で絵本が求められる理由であろう。とするならば、次なる10年もその果たす役割は大きいことが予想される。厳しい時代に生きる力を与えてくれる絵本がさらに一層求められている。

## 参考文献

『子どもと読書』親子読書地域文庫全国連絡会 2001～2010

『100人の心に響いた絵本 100 1998-200 (別冊太陽 日本のこころ)』 平凡社

『赤ちゃんと絵本をひらいたらーブックスタートはじまりの 10 年』 NPOブックスタート・編集 岩波書店